

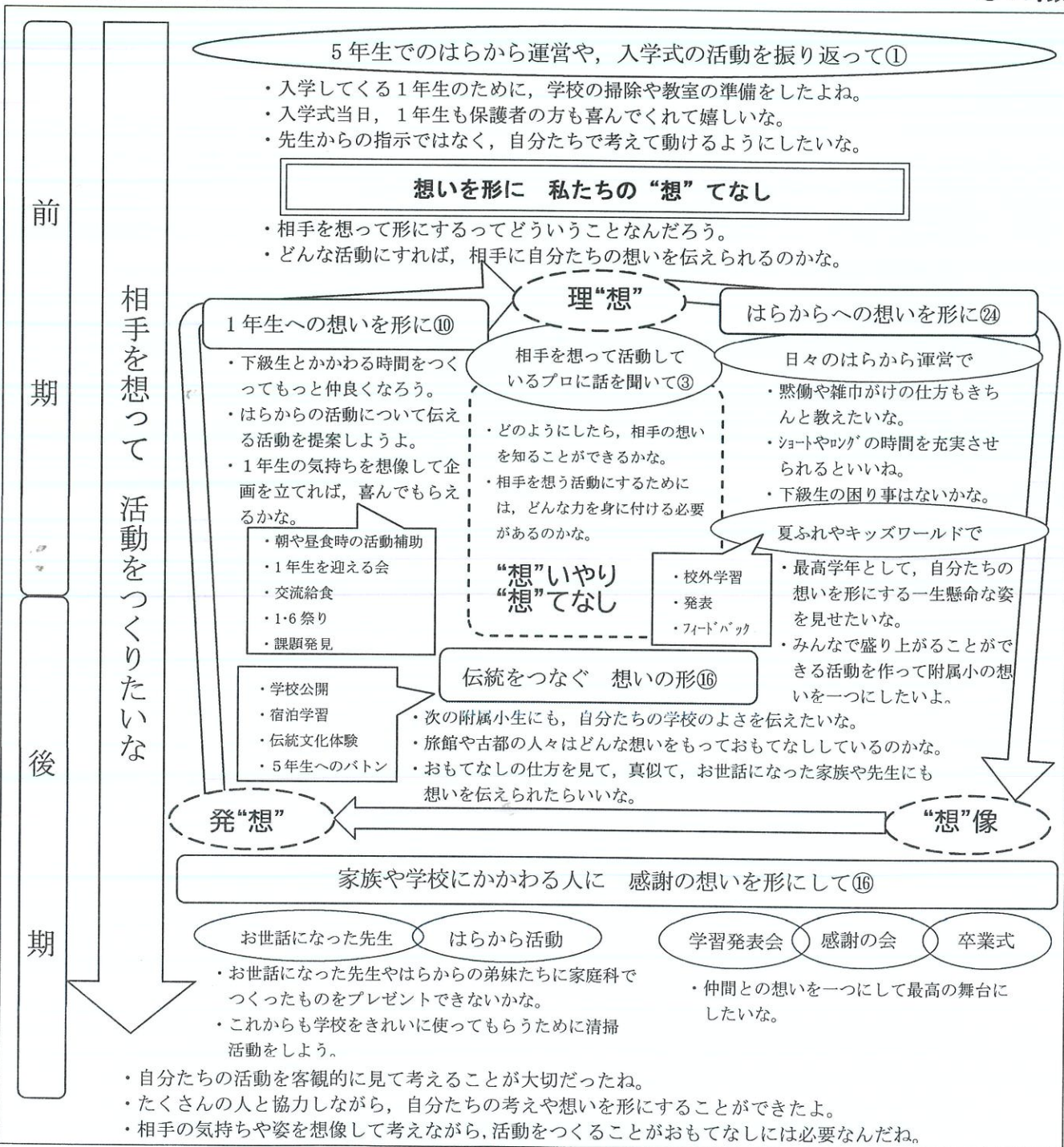
1 テーマ 想いを形に 私たちの“想”てなし

2 めざす子どもの姿

- 自分たちの想いや願いをもとに設定した課題を解決する探究的な過程の中で、他者とよりよい関係を築くための方法を理解し、話し方や接し方など、相手とともに活動をつくっていくための適切な表現方法を身に付ける。
- 課題解決のための探究的な学習過程の中で、自分たちの想いを実現しつつ、相手を想った活動になっているか、活動方法や自身の行動を分析しながら、よりよいものを求めて改善したり、新たな活動を考えたりすることができる。
- 自分たちの想いだけでなく、相手の想いも考えながら、表したい想いを形に表していく探究的な活動に、自律的に取り組んでいる。

3 活動計画 (70 時間扱い)

○：時数



4 実践報告
〈ひびきの立ち上げ〉

昨年度のひびきの活動で「Society5.0」という今後の未来社会について調べたり体験したりしたことで、「未来の社会に向けて自分たちができることを考えたい」という思いを育んできた。今年度に入り、コロナ禍が明け、様々な学校行事が元通りになる中、学校の最高学年として、新入生のために、はらからの弟妹たちのために「もっと楽しませたい」「学校にいるみんなの笑顔をつくりたい」という想いをもち、そこで、「相手意識をもって人と関わる際に大切なことは何なのか」「心をわかり合いながら活動をよりよくしていくにはどうしたらよいか」という想いの下、6学年のひびきの時間のテーマを「想いを形に ～わたしたちでつくる“想”てなし～」とし、互いの想いを繋ぎながら自分たちならではのもてなし方を考え、活動をつくっていくことを目指して実践していくことにした。

〈1年生を迎える会での“想”てなし〉

まず子どもたちが目指したのは、年度初めの1年生の“想”てなし方であった。「もっと距離を縮めて関わりたい」「附属小のことをたくさん教えたいな」という想いの下、「1年生が困っていることは何か」を自分たちが1年生だった頃のことを思い出しながら考え、朝の時間に荷物整理の補助をしたり、給食の配膳当番を手伝ったりすることにした(写真1)。その関わりの中で、うまく指示が通らなかつたり、逆に1年生が甘えてくるばかりで自律しなくなつたりと6年生の困り感が募っていたため、幼稚園の先生や学童の先生からお話を聞くことにした。声のかけ方一つでも、相手の行動を促すために「じゃあ一緒にやってみようか」「ここまでは一緒にやるから、あとはお願いできるかな」など命令や指示だけでなく、相手と目線を同じにして一緒に考えたり、行動したりすることが大切なんだと気付いていった。



写真1 給食の配膳当番を手伝う6年生

〈キッズワールドで“想”てなし〉

1年生との触れ合いを通して想いを形にしてきた子どもたちは、「自分たちでつくるキッズワールドを通して、附属小を盛り上げたい」と、全学年の仲間と「想い」を一つにして行事を成功させたいという想いを強くしていった。昨年度学んだ「会を支える側の気持ち」を胸に、全体のテーマで準備を進めつつも、6年生の競技では何か“想”てなしを形にできないかと考えていった。そこで、借り物競走のような形で借り人を探し、その人をサポートしながらアトラクションを進むという形をつくりだした(写真2)。下級生と一緒に絵合わせをしたり、ワニワニパニックをしたりして笑顔溢れる競技となり、キッズワールド当日に下級生から「楽しかった」「またやりたい」という声を聞いた6年生は、成功したという達成感を感じていた。



写真2 キッズワールドの競技で、一緒に笑顔になる6年生

〈学校公開で“想”てなし〉

校内で様々な“想い”を形にした子どもたちは、次に入ってくる新入生たちももてなしたいという想いをもち、これまで1年生をもてなしたノウハウや夏のふれあい活動やキッズワールドで実践してきたことを土台として計画を立てた。折り紙や工作、輪投げブースなど遊びを考えるのはもちろんのこと、膝をついて幼児と目線を合わせて説明したり、優しく手助けしたりするなど相手に合わせて関わるようになっていった。

〈校外学習で学んだ日本一の“想”てなし〉

今年度は様々な業種の方から「おもてなし」について学び、自分たちの活動へと還元していった。ホテルマン、水戸市観光課の方、京都の旅館の方、タクシーの運転手さん、舞妓さん…。その最後に、日本一のホスピタリティ精神の下、お客様をもてなしていると言われるディズニーリゾートのキャストさんの姿から学ぶ機会を得た。事後の振り返りでは、「TDRでの満足感や幸福感の裏側には、ゲストの笑顔のために労を惜しまず活動するキャストさんの想いが隠れているんだ」「世界観を大切に、キャストさんも楽しみながら働いていたね」と気付く姿が見られた。自分たちも困難にぶつかりながらも様々な行事を創り上げたからこそその実感を伴う学びがあったようだ。



写真3 TDRでの視察中、おもてなしを受け笑顔になる6年生

1年間のひびきの活動を通して、自分たちのやりたいことだけでなく、対象となる相手の想いを大切しながら活動を考え、創っていく姿が見られた。相手に寄り添う6年生の心遣いが、ひとつひとつ形となり、笑顔とともに、附属小の新たなはらから活動の形が作り出された。これらの活動が子どもたちの今後の糧となることを期待している。

(文責：深谷 泰弘)